



附属小のマスコット・キャラクターが決まりました！平和で一人一人が輝く学校という願いが込められています！

令和5年度 附属小学校だより

スマイル³ふぞく



第11号 令和6年3月21日（木） 校長 古野 祐一

今年度も、有り難うございました！

1年の締めくくりとなる全校行事が、3月7日（木）に実施した「送別集会」。6年生に感謝の思いを伝える下級生の姿を見て、改めて「北斗の子はやっぱり素敵だなあ」と思いました。なぜかと言いますと、まず、ユーモアがあります。人を大切にしたユーモアの心は、皆を笑顔にします。次に、温もりがあります。6年生のための演技や言葉かけの一つ一つに、全力で真剣に取り組む姿に心が温まります。最後に感動があります。6年生とお別れする寂しさに涙する1年生の姿や、「自分たちの学校は自分たちで創る」といった心を、下級生に引き継ぐセレモニーなど、感情が大きく動かされました。

子どもたちを日々支え、励まし、送り出してくださった御家庭の応援あってのゴールの姿です。スマイル附属と一緒に創り上げてくださっていることに、改めて感謝申し上げます。

卒業式の凛々しい姿に感激！

3月15日（金）に、光窮6年生92名が、北斗の学び舎を卒業しました。これまで「自分たちの学校は自分たちで創る」と、様々な新しい企画を考え、楽しいから始まる学校づくりにチャレンジを続けてきた卒業生。5年生の時から、パソコン片手に校長室にやってきて、様々な企画のプレゼンを聞かせてくれたことを懐かしく思い出します。学校行事で無くなっていた「北斗祭」を復活させたいという思い、最後に実現した熱意、改めて、この92名を誇りに思います。卒業生が残してくれた「やってみないと分からない」の心を受け継ぎ、在校生・教職員が一体となって、スマイル附属をますます輝かせていきます。

新リーダーが動き出しています！

卒業式の準備を中心になって進めていた5年生が、新リーダーとして朝掃除に取り組んでいます。プランターを動かし隅々までごみを掃きとろうとする姿、松の葉一つも残さず掃きとろうとする姿、皆真剣です。やる気がみなぎっている姿は、朝の北斗の学び舎を引き締め、活気をもたらしめています。

令和6年度も、頼もしい新リーダーと共に、変化に満ちあふれたスマイル附属を目指して参りますので、応援よろしく願いいたします。



6年生にユーモアあふれる出し物をする5年生。



北斗祭で合奏を披露するメンバー。



各学級でメッセージを受け取る卒業生。



5年生が新リーダーとして動き出しています。

※裏面に続きます！

北斗の感動

「北斗の学校への誇りは、一生の宝物」

卒業生に送った言葉です。附属小学校は、6年間の思い出、仲間との繋がり、教職員への親しみなど、その全てが学校への誇りとなる特別な学校であると思っています。

本校3月の風物詩として、卒業生が仲間と訪れます。運動会や北斗祭などの行事から低学年時の授業のことまで、当時の思い出を鮮明に憶えています。私なんかは「先生まだ短パン履いているんですか」と笑い話になります。多くの卒業生が「小学校に戻りたいな」と口を揃えて言ってくれます。ありがたいです。

卒業生の保護者が教職員に差し入れを持ってきてくださいました。25年間附属学校に関わられ、当時の先生方との思い出を語られていました。「附属小学校と附属小学校の先生方が好き」と言われていました。本当にありがたいです。

特別な学校

学校評価の中でも、子どもと担任の日々の営みに対して好意的な御意見をいただきました。また、あるお母様との立ち話の中で、担任を褒めてくださることがありました。早速担任に伝えると、涙を浮かべて喜んでいました。日々、子どもと向き合い、保護者の皆様の思いに応えようと努めている者にとっては、こうした温もりある言葉や連絡帳に書いていただく一言が何よりも励みになります。ありがとうございます。

離任する教職員に対して「来年、先生の理科の授業を受けたかったな、もっといて欲しかった」と、悲しそうに話す男の子。担任へ1年間の感謝の思いを伝えるためにサプライズを考える子どもたち。

純粹な心で、大切な誰かのために、一生懸命である北斗の子。今年度もたくさんの感動が北斗の学舎に生まれました。

皆にとって、特別な学校であり続けるために前へ進み続けます。 教頭 橋田 晶拓

未来で輝く北斗の子

非認知能力

先日、来年度の人事異動が発表され、私も長年お世話になった附属小学校を去ることを知りました。

附属小学校は研究の学校です。時代の流れやこれから訪れる世界の姿を見据え、未来で輝く北斗の子を育てるべく、価値のある授業を目指しています。これまで、北斗の子とともに創ってきた授業の数々に思いを馳せながら振り返る日々を過ごしています。

ところで皆様は、小学生時代に御自身が受けた授業をどれくらい覚えていらっしゃるでしょうか。人によるかとは思いますが、私は、実を申しますと、授業自体はほとんど思い出すことができません。おそらく当時御指導くださった私の恩師も、しっかりとこだわりをもって授業をしてくださったはずですが、受ける側だった当の私は、授業場面や内容などをほとんど覚えていないのです。そのことに気付いた私は、その時点から自問自答を繰り返しました。「今楽しそうに授業を受けている子どもたちも、いずれはその記憶から失われていくのではないか？」

言葉一つ、教材一つにこだわって創る授業の価値について考えました。いずれ記憶から消えていくのであれば、授業に価値はないのでしょうか。

決してそんなことはありません。確かに、出来事としての授業やその内容は、ほとんどが記憶としては残らないのかもしれませんが、しかし、この1時間で「友だちと協働したこと」や「難しかったけどやる気を出してがんばったこと」などの一つ一つの積み重ねこそが、その子の人間性を創っていることは間違いありません。この「非認知能力」と呼ばれる力を、いつまでも高め続ける附属小学校であり続けます。

主幹教諭 才木 崇史

教えから学びへ

幸せを掴む子ども

「幸せを掴む子ども」を主題に掲げた3か年の研究が終わりを迎えます。幸せを掴む子どもを育むために、「自律した学び」の実現を目指し、様々な授業実践に取り組んできました。

数時間にわたり、子ども自らが立てた学習計画に沿って自学的に進める学び。解決したい課題や解決するための方法を子ども自らが選択し、個別に取り組む学び。子ども自らが必要に応じて級友に協力を呼び掛け、協働して解決に臨む学び。常に「子ども」を主語に、新たな取組に挑戦してきました。

これらは、「わかる・できるを目指す授業」というよりは、「心を育む授業」と言えるのかもしれませんが。ここでの「心」とは、「自分を高める力(向上心や自己肯定感等)」「他者とつながる力(社会性やコミュニケーション力等)」「自分と向き合う力(自制心や自己調整力等)」を指します。まさに、学校目標である「一步前へ、何度も挑戦！」する子どもに育みたい心と重なるものであり、未来社会を創り出すために必要な力です。

3か年研究は終わりますが、「教えから学びへ」の研究実践は、まだ緒に就いたばかりです。今後も、子どもの思いを大切に実践を重ねてまいります。

1年間、子どもの学びに多大な御支援・御協力を賜り、ありがとうございました。

教務主任 松尾 勇哉